http://www.music-communication.com

神戸女学院大学

東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 27 年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 27 年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・平成 27 年度活動概要 …… 3

平成 27 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

1．第 1 回　響き合いを求めて～即興による音楽療法の実際 …… 4
2．第 2 回　インタラクティブ・コンサートの実践 …… 6
3．第 3 回　カラダを奏でて音を楽しむ …… 8
4．第 4 回　音楽ワークショップの実践 …… 10
5．第 5 回　卒業後の活動の可能性 …… 12
6．第 6 回　演劇を用いたコミュニケーションデザイン …… 14
7．第 7 回　神戸女学院大学 実習報告会 …… 16
8．第 8 回　東京音楽大学 実習報告会 …… 17
9．第 9 回　総括 …… 18

各大学実習報告

1．音楽ワークショップ　みないけキッズアーティスト「みんなでつくろう！音楽の輪」…… 19
2．東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座 特別セミナー…… 21
3．神戸女学院大学「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに
第 6 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」…… 23

おわりに …… 27

はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション　―音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、平成 21 年度から東京音楽大学・神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学の３つの大学が展開してきた取り組みで、文部科学省に３年間の財政支援を受けたのちも継続して事業を進めてきました。平成 27 年度は、共通科目である「ミュージック・コミュニケーション講座」の配信を東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部の２大学のみに縮小し、開講日時も金曜４限（神戸女学院大学は金曜３限）に変更しましたが、専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた音楽人の育成という当初の目的は変わることなく、大学間連携の特色を生かした教育を実践しています。

本プロジェクトの始動期に履修した学生たちは、音楽教員やワークショップリーダーとして、ここで学んだことを卒業後に社会で活かし始めています。今年度はそうした先輩たちが共通科目や特別セミナーで学生たちに自分たちの経験を語る機会を設け、学生たちが卒業後の展望を抱くことのできる機会としました。また９月には、３年前に招聘したギルドホール音楽演劇学校出身の講師２名を再び招聘して、各大学で特別セミナー・特別研修を実施しました。今回は、同じ講師であっても３年前とはまったく異なる音楽づくりを展開する様子を目の当たりにし、ワークショップの多様性と柔軟性を改めて学び直すよい機会となりました。

この１年間の活動をここにご報告申し上げると同時に、本プロジェクトにご協力いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

2016（平成 28）年３月

武石みどり（東京音楽大学　教授）

※開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座 A・B（東京音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

教員・スタッフ（平成 28 年 3 月現在）

東京音楽大学	武石　みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	上條　浩史		連携センタースタッフ
	高橋　英美		連携センタースタッフ
	磯野　恵美		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上　智実	神戸女学院大学音楽学部	教授
	永吉　りう子		連携ルームスタッフ
	増田　明日香		連携ルームスタッフ
	朝山　加奈子		連携ルームスタッフ

平成 27 年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、2 大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成 27 年 4 月 17 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 1 回：平成 27 年 5 月 22 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 2 回：平成 27 年 5 月 29 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 3 回：平成 27 年 6 月 19 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 4 回：平成 27 年 7 月 10 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 5 回：平成 27 年 10 月 2 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 6 回：平成 27 年 10 月 16 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 7 回：平成 27 年 11 月 20 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 8 回：平成 27 年 12 月 4 日（金）	発信校：東京音楽大学
第 9 回：平成 28 年 1 月 22 日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

平成 27 年 7 月 24 日（金）於：区民ひろば南池袋
音楽ワークショップ　みないけキッズアーティスト「みんなでつくろう！音楽の輪」

平成 27 年 9 月 23 日（水・祝）於：東京音楽大学
東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座特別セミナー

平成 27 年 9 月 24 日（木）～ 27 日（日）於：神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに第 6 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 27 年度　第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「響き合いを求めて～即興による音楽療法の実際～」
講　師	石村　真紀（相愛大学音楽学部准教授）
実施日時	2015 年 5 月 22 日（金）14:10 ～ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	平成 27 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」第 1 回は、相愛大学音楽学部准教授で、イギリスにて即興演奏を用いた音楽療法のディプロマを取得され、主にコミュニケーションに障害を持つ児童から成人を対象に病院や障害者施設にて臨床実践を行っておられる石村真紀氏をお招きして、神戸女学院大学から発信した。 講座は、「響き合いを求めて～即興による音楽療法の実際～」と題し、まずは音楽の起源、音楽療法の歴史を学んだ。「音楽」とは人と人とをつなぐ架け橋であり、古代エジプト時代から職業楽師が宮廷や宗教儀式で重要な役目を果たしていたことがピラミッドから明らかになっている。また、「音楽」という漢字の語源からも音楽を考察し、“ 樂 ” という漢字が、“ 木 ” と “ 糸 ” から「琴」や、その形から「鈴」を表しており、「音楽」とは、心の言葉を音にすることであり、それが療しにつながるという話が興味を引いた。次に、音楽療法士（セラピスト）の定義や大切なポイントについてのお話もうかがった。セラピストは、相手（クライエント）とコミュニケーションをとる中で、「共感」「受容」「誠実さ」を基本姿勢として持ち、クライエントの行動や考えに「共感」してそれを「受容」し、「誠実に」自分が自分らしく表現することにより、クライエントとの信頼関係を構築していく。 これらのことを踏まえた上で、実際に石村先生が行われた音楽療法の動画を見せていただいた。自閉スペクトラム症の 4 歳男児のもので、言葉を発することなく、他者とも交わることができない男児が回数を重ねるごとに石村先生に心を開いていく様子を見守った。最初は同じ空間にいても、石村先生と交流をとらず動き回っていた男児が楽器をたたいて、それに呼応するように先生が楽器をたたくと、またそれに合わせて楽器をたたくといった掛け合いをするようになり、そのことにより 2 人の間に交流が生まれ、最後には、「欲しいものを取ってくれ」と男児が先生の手を取って歩いたときには感動を覚えた。 人と人は言葉がなくても音楽を通してつながり、心を開くことにより信頼関係を築くことができるということを学び、改めて「音楽」の持つ偉大な力について再認識、再確認する良い機会となった。

〈学生のことば〉

・音楽療法について全く知らなかったので、音楽と医療がどう結びつくのか今まで疑問でしたが、今回の授業で音楽の起源を知り、人体が音と深く関わっていることがよく分かりました。即興がコミュニケーションと深く関係しているのも面白かったです。

（神戸 / ミュージック・クリエイション / 3 年）

・はじめての本格的な講義ということで少し緊張しましたし、どのようなことをするのかも分かっていなかったのですが、今まで自分が知らなかった即興による音楽療法について知ることができ、とても興味深く感じました。音楽の “ 樂 ” の文字に

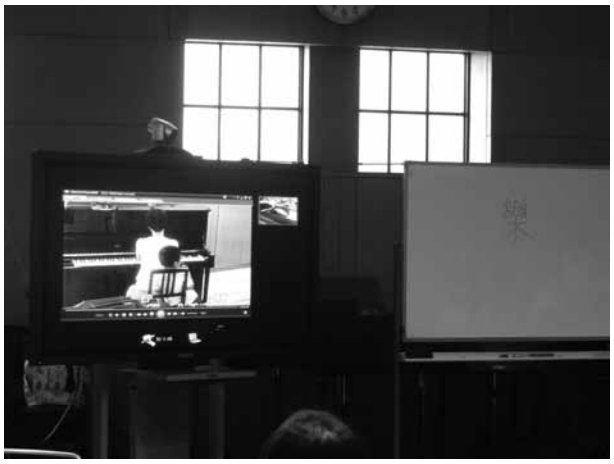
隠された意味や基となった楽器の話や、音楽には力があるかなどのみんなの意見を聞け、普段無意識で感じていることに意識を向ける良い機会になりました。（神戸 / ピアノ /1 年）

・音楽療法の話を初めて聞きました。音楽の起源から実際の療法の現場までお話いただき、とても勉強になりました。男の子のセッションの映像がとても印象的でした。クライエントの心に寄り添って気持ちを通わすようにしている様子がすごいなぁと思いました。回を重ねるごとに変わっていくところから、音楽の持つ力を感じることができました。（東京 / ピアノ / １年）

・自閉スペクトラム症の子の事例がとても心に残りました。音楽療法というのは具体的にどういったことなのか、わからなかったのですが、動画から言葉がなくても音楽で通じ合っているのが見受けられ、やっぱり音楽の力ってすごいなぁと思いました。（東京 / ピアノ / １年）

・同質の原理を活かしたいと思いました。まねをすることで、その人の気持ちが分かり、さらに相手もまねをされたことで心を開きやすくなるなど、単純だけどすごい原理だと思います。少し意味が変わってくるかもしれませんが、連弾などのデュエットでも、相手パートに寄り添うことで息が合うことはもちろんですが、お互いのアイデアが出てきたり、自分を表現しやすくなったりするのではないかと思いました。（神戸 / ピアノ / １年）

・「音楽の力」という言葉は日々よく聞きますが、具体的に考えたことはありませんでした。音楽療法という分野を考えることにより、新たに色々なことを知ることができました。即興について、音楽に触れてもらうという考えの下で行うことを学ぶことができました。「心に寄り添い、クライエントが自ら発動するのを待つこと」という言葉は印象的でした。実際のヒロくんの映像はとても興味深かったです。段々とこちらに近づいてくれるヒロくんの様子を見て感動しました。（東京 / ピアノ / ２年）



※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 27 年度　第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「インタラクティブ・コンサートの実践」
講　師	佐藤 展子（ピアニスト、東京音楽大学講師）
実施日時	2015 年 5 月 29 日（金）14:10 ～ 15:30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	本学卒業生であり、ピティナの学校クラスコンサートに数多く出演された経験をお持ちの佐藤展子先生に、これまでの活動歴や学校クラスコンサート（アウトリーチ）の経験についてお話をしていただいた。 学校クラスコンサートは一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）が主催するもので、最初は、ピティナのコンクールで優秀な成績を収めた人たちが派遣されてきたが、年を経るにつれて、アウトリーチの適性がある人材が残るようになった。小学校の中学年を中心として 1 クラス単位を対象とし、小学校の音楽室で 45 分間のプログラムを行う。演奏とトークの割合は五分五分であるため、一人で行うよりは管楽器や弦楽器等、異なる楽器の人と組んで、それぞれの楽器紹介を交えながらプログラムを組むことが多い。演奏形態が決定したら、演奏時間や内容、楽器の特徴に留意して選曲し、楽器や楽曲についての紹介をしながら、最後は子どもたちとの共演で締めくくる。許容範囲内で楽器に触れさせたり、共演したりする体験型コンサートを目指しているため、話の中に積極的に質疑応答を取り入れ、子どもの興味を引く内容や言葉遣いに留意することで、双方向のコミュニケーションが成立するように気をつけているとのことであった。 学内のレッスンや試験で楽曲を演奏することと、社会に出て訪問先の状況や要望に合わせたプログラムを組み、親しみやすい語り口によるトークを交えながら演奏することの間には大きな隔たりがある。佐藤先生のご経験によれば、楽譜に従い楽曲の演奏だけに集中していた学生時代とは大きく異なり、初見、即興、アレンジ、トーク、および人間関係構築のスキルが必要となるとのこと。学生時代からそういった点を意識してトレーニングすることで、卒業後により大きく社会で活躍できるものと期待される。佐藤先生の落ち着いた語り方には、聴く人を安心させるところがあり、ご経験に裏打ちされた実践的な内容は興味深かった。

〈学生のことば〉

・これから、どこかでこのようなコンサートを開くとしたら、という気持ちでずっと聞いていました。普段の勉強と実社会での活動とのギャップはもちろんあり、物事の考え方を一方からではなく、様々な角度で見ることができたらとても良いと思いました。一つだけではなく、色々な知識をつけることも重要だと思いまいした。（東京 / ピアノ /2 年）

・小学生のとき、このようなインタラクティブ・コンサートはなかったので、活動について一つ一つ新鮮に聞けました。学年や特徴に応じて内容に変化を付けていると聞いて、今まで受ける側として当たり前のように思っていたことが、工夫の固まりだったということが分かりました。インタラクティブ・コンサートは普通のコンサートと大きく違い、聞いてくださる方とコミュニケーションをとることが、演奏と同じくらい大切だということが分かりました。（東京 / 声楽 /1 年）

・自分たちにとっては当たり前のことだったり、考えつかないようなところも細かく配慮をして、ど

れだけわかりやすく興味を持たせながら集中させるかを考えたりするのが難しいけれど、よく考えないといけないと思いました。言葉のキャッチボールの大切さがわかりました。

（東京 / ピアノ /2 年）

・子ども達との接し方やプログラムの組み方などとても参考になりました。私はインタラクティブ・コンサートに対して「曲をどう面白く聴かせるか」しか考えていなかったのですが、「楽器の魅力を伝える」という視点もあるのだと知りました。

（東京 / フルート /4 年）

・パッと言われてその場で弾ける能力を身につけるということを聞いて、その対策練習を調べてみようと思います。それから、即興力もつけたいと思ったので、今後伴奏形を変えたり、三度上にメロディーを・・・など、工夫してやってみたいと思います。やはり会話が一番大事である、と感じたので、佐藤先生のように話し方に気をつけて、人に伝えられるように活かしていきたいです。

（神戸 / ピアノ /1 年）

・私は、小学生の時にインタラクティブ・コンサートのようなものに参加したことがありませんでしたが、高校 1 年生のとき、小学校や支援学校へコンサートを開きに行きました。当時は、小学生相手にどんなプログラムにしたらよいのか、言葉使いまで意識が行き届いていなかったと佐藤先生の講義を拝聴して思いました。そして、演奏ばかり一方的にしていても子どもたちは退屈してしまう、と気づきました。中でも、子どもたちと校歌や合唱を一緒にするというのには、その手があったか！と思いました。少しでも子どもが音楽に興味を持ったら、日本でももっとクラシックが普及するのではないかと思います。

（神戸 / 打楽器 /1 年）

・今まで演奏会を聴くという受身の立場でしたが、今回、講座を受けて、初めて実践する側の戦略？を詳しく探り、とても新鮮な時間でした。演奏までのトーク（音の出る仕組みや特徴の説明など）や、選曲など、演奏会をするときにとてもためになるお話ばかりでした。演奏会を主催することは私にとってまだ身近な存在ではないので、考えるきっかけとなりました。　（神戸 / ピアノ /1 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 27 年度　第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「カラダを奏でて音を楽しむ」
講　師	砂連尾　理（振付家・ダンサー・神戸女学院大学講師）
実施日時	2015 年 6 月 19 日（金）14:10 ～ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	第 3 回目の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、振付家・ダンサーであり神戸女学院大学音楽学部舞踊専攻の講師である砂連尾理先生をお招きして、神戸女学院大学から発信した。 講座は、「カラダを奏でて音を楽しむ」と題し、舞踊専攻の 4 年生 5 名のサポートを得て行った。まずは、教員と学生一人一人による自己紹介の後、音楽と舞踊の密接な関係、近代以降、西洋音楽が日本に入ってきてから音楽と舞踊が細分化、専門化されたことなどが語られ、動いて音を出し、感じることを通して今一度身体に立ち返ることを考えようと提唱された。 軽いストレッチの後、砂連尾先生の友人でもあり本講座の講師をしてくださったこともある野村誠氏と片岡祐介氏による「あいのてさん」の ”Book Music”（本を使って音楽を奏でる）のヴィデオを見た上で、ペットボトルや新聞、空き缶など、身の回りにあるものを使って音楽作りをした。舞踊専攻の学生によるデモンストレーションでは、体全体を使っての表現力に圧倒された。次に、同じく「あいのてさん」の ”Shoe Music”（足踏みによる音楽）のヴィデオを見てから、身体の色々なところを使って音を出すワークを行ない、神戸と東京で回線を通してのセッションを行った。最後に、アメリカの作曲家ジョン・ケージによる ”Water Walk”（家庭の台所にあるものだけを使った音楽）のヴィデオを見て、今までの学習で作った音楽を更に発展させ、5 分間の音楽作りに取り組んだ。最初は様子見をしていた学生も最後には身体全体、会場全体を使って大胆に音を出し、会場は熱気に包まれた。 学生は、「雑音が音楽になるということが面白かった」「身近な音で音楽を作るのが新鮮だった」とやや興奮気味に語った。講師から、「技術を身につけることは大事なことだが、そのことに囚われすぎると体が疎かになってしまう。"Play Music、Play dance、Play ＝楽しむ " ことが大事なことであり、そのために色々な雑念をそぎ落とすと『カラダ』を使うことに戻る」との話があり、説得力のある講義になった。

〈学生のことば〉

・楽器でなくても音が鳴るものなら音楽ができるんだなと思いました。それに楽器ではないので難しくないし、誰でもできるというところが面白かったです。私は打楽器専攻で、今日見たブック・ミュージックやボディー・パーカッションのようなことを調べたり、動画サイトで見たりしたことがありました。だから先生の講座にはとても興味があったし、勉強になりました。ありがとうございました。（神戸 / 打楽器 /1 年）

・もっと身の回りの音に耳を傾けると面白い発見がたくさん出てくるのではないかと思わされました。とても楽しかったです。リフレッシュできました。（東京 / フルート /2 年）

・「体を動かしながら音を出す」ことの難しさを感じました。普段、歌を歌ったり、ピアノを弾いたりする時、意識して体を動かすことがあまりないのですが、よく考えるとそれは不自然なことなのかもしれないと思いました。音を出しながら、楽しいと思うことができました。“五線”という決められた世界から飛び出し、自由にやっていると、「自分の音楽」「自分の個性」が見えてくるなと感じました。（東京 / ピアノ /4 年）

・今回の講義を終えて、体からわきあがる音楽を体験したせいか、その日のピアノの練習にも変化がありました。自分の体で感じているような“心技一体”感があり、これこそが音楽なのかなと思いました。自分が出したい音、そこから生まれるハーモニーの空気感、それらを感じることをこの講義で学んだので、それをピアノに活かしていこうと思います。（東京 / ピアノ /1 年）

・いつか楽器以外のものを使ったアンサンブル曲を作ってみたいと思いました。
（神戸 / ミュージック・クリエイション /3 年）

・「楽しい」という気持ち、「自分の音が皆の役に立っているんだ」という実感を持ってもらえるような活動をしたいと思います。「音楽＝リズム」と旋律という固定観念にとらわれず。柔軟な発想を持つように心掛けたいです。音楽が全く分からない人、障がいを持っている人、高齢者など、様々な立場に立って「音楽」を考えていきたいです。
（東京 / ピアノ /4 年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 27 年度　第4回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽ワークショップの実践」
講　師	片岡 祐介（作曲家・打楽器奏者）
実施日時	2015 年 7 月 10 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	障がいのある子どもたちや高齢者のために音楽ワークショップを行っておられる片岡祐介先生に、音楽ワークショップの実践について講義していただいた。 今回の講義は通常の講義とは異なり、先生が日常のワークショップでされているように、「参加者の顔を見てから、何をやるか考える」というやり方で進められた。あらかじめ設定した内容と段取りに従って事を進めるのではなく、参加者と雑談する中で次第に接点を作り、コミュニケーションを図っていく――その方法は、箇条書きに整理して明示されるようなものではないためにわかりにくかったかもしれないが、片岡先生の方法から感じられたのは、自分のペース、自分の方法ではなく、あくまでも相手のペース、相手の方法を優先し、相手を理解し、寄り添おうとする姿勢である。 私たちは音楽ワークショップをリードする際に、どうしても自分のアイディアと計画を守ることに頭がいっぱいになってしまい、相手のことよりも自分のことを考えてしまうことが多い。障がい者や高齢者等、自分の思うところをうまく伝えたり表現したりすることのできない人たちを対象とする際にはもちろんのこと、健常者が対象であっても常にその一人一人に目を向け、一人ひとりのペースと関心に寄り添おうとする姿勢は、コミュニケーションの基本でありながらも、このMC 講座でワークショップやインタラクティブ・コンサートのノウハウを学ぶ時に、つい忘れがちになってしまう部分である。「いいワークショップができた」という際に、第一義的に音楽的なクォリティを考えてしまう思考習慣から抜け出し、もう一度コミュニケーションの基本に立ち戻る機会を提供する意義深い講義であった。

〈学生のことば〉

・音楽の型やルールを決めないで、その場で周りの人達に合わせながらみんなで行うというのが新鮮でした。子供たちは単純なリズムしか理解できないと思っていたのですが、先生の話を聞くと子ども達の才能？について改めて考えさせられました。
（東京 / ピアノ /1 年）

・「コミュニケーションを決めつけない」という話が印象深かった。あえて手探り状態でその子と向き合うことで、色々なやりとりから広げていけるということもあるのだなと感じた。「知識」よりも「行動」に反応があるということを初めて学べたのがとても大きかった。小手先よりも、そういった気持ちに反応してもらえるのだなと感じた。（東京 / 作曲 /4 年）

・シミュレーションをして臨むのではなく、その場の雰囲気、一人一人の反応に合わせてワークショップを進めていくことが大切なのだなと思いました。とても難しいことだと思いますが、人と人との対話、心と心のつながりを大切にし、「楽しかった」と感じてもらえるワークショップを目指していきたいです。「言葉にして音楽を奏でる」という新しい視点が面白かったです。子供とワークショップを楽しむときも、自分がピアノを弾くときも、役に立ちそうだなと思いました。（東京 / ピアノ /4 年）

・今日は、たくさん学んだことがありました。特に「目の前の人に興味をもち、その人にあった活動をする」というのが印象強かったので、これから教える立場や活動していくようになったら、このことを忘れずにやっていきたいと思いました。

（東京 / ピアノ /1 年）

・リズムは決められたものではなく、言葉のように自然なものだという話が印象に残りました。普段楽譜を見て音楽を演奏するとき、私たちは機械的になりがちですが、いつも自然さを感じ続けたいと思います。

（神戸 / ピアノ /1 年）

・子どもに教える際、出来上がった曲に一度言葉を入れてみるというアイディアを是非使ってみたいと思います。音符で覚えていても、言葉にすると言葉でリズムを覚え、語りだすそうです。これはピアノでも同じだと思うので、こういう練習を取り入れてみようと思いました。（神戸 / ピアノ /1 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 27 年度　第５回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「卒業後の活動の可能性」
講　師	大西小百合（ピアノ）2014 年度東京音楽大学卒業生 佐藤　礼奈（ピアノ）2014 年度東京音楽大学卒業生 磯野　恵美（フルート）2013 年度東京音楽大学卒業生
実施日時	2015 年 10 月 2 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学　A 地下 100 教室
講座の概要	ミュージック・コミュニケーション講座を 2 年以上連続して受講した卒業生 3 名に、現在の活動内容を紹介してもらい、授業内容が卒業後の活動にどのように結びついているかを語ってもらった。 大西さんは板橋区立小学校の音楽専科教員で、「音楽を分かち合う　―教員として、ワークショップ・リーダーとして」というタイトルにより、ワークショップを学んだ経験が小学校教員としての日常――授業や子どもたちとの関わり方――の中でどのように生かされているかを語った。 佐藤さんは財団法人地域創造の派遣アーティストとしてアウトリーチ活動の基礎訓練を受け、これから広島地域でのアウトリーチ活動を開始しようとしている。「私と音楽の関わり方　―アウトリーチ・アーティストになるまで」というタイトルの下に、オーディションを受け、まったく異なる出自・専攻楽器の人々と一緒に訓練を受けた経験について紹介した。 磯野さんは卒業後、東京文化会館ワークショップ・リーダーとして、他のリーダーと数名のグループを組んでワークショップの企画作成、東京文化会館および都の関係施設でのアウトリーチを行っている。MC 講座で学んだギルドホール音楽院のワークショップ、また東京文化会館で学んだポルトガル、カーザ・ダ・ムジカのワークショップの方法論をベースに、多様な地域や年齢層を対象とするワークショップを企画・実践するスキルを身につけた経験について語った。 3 人ともパワーポイントや動画を用いながら自分たちの問題意識と、在学生へのアドバイスをわかりやすく語り、MC 講座に有益なフィードバックとなった。

〈学生のことば〉

・“音楽家は演奏技術だけでなく、ワークショップやアウトリーチなど、企画力も求められる”ことがわかった。視野を広げ、自分から行動を起こすことが大事だと思った。　（東京 / ピアノ /1 年）

・音楽を仕事にしている方の生活、また日常で意識していることについて聞けて良かったです。年齢も近いので、現在の社会の中で音楽をどのように発信していけば良いのか雰囲気が伝わってきたので、自分の今後の励みになりました。
（東京 / ピアノ /4 年）

・音楽だけで食べていくのは本当に頑張らないと難しいことが改めてよくわかったので、これから本気で将来のことを考えていこうと思いました。音楽の中で生きている三人の先輩が輝いて見えたので、私もそうなりたいなと思いました。
（東京 / ピアノ /1 年）

・直接音楽とは関係のないことでも、生きて行く力をつけるために可能な範囲で外に出かけてみようと思います。頭の中で考えているだけでなく、実際に経験して得るものや縁を探しに外に行き、最

後にそれが自分のスタイルにつながり生かせればと感じました。（東京 / ピアノ /4 年）

・先輩方のリアルな話を聞けてとても勉強になりました。（東京 / フルート /2 年）

・将来について決めなければいけない時が来るまで、どうやったら自分の 1 番したいことを形にできるか考え続けないといけないと思いました。（神戸 / ピアノ /1 年）

・本当にやりたいことがあって、それが達成できるまでは時間がかかるのだと思いました。私はまだ何をやりたいか分からないけれど、今日お話してくださった方のように粘り強くいかなければならないと思いました。（神戸 / 打楽器 /1 年）

・3 人の方の話を聞いて、活動している内容はそれぞれに違うけれど、色々なことをたくさん考えて選んだのだという誇りのようなものを感じました。音楽だけで生きていくのは難しいからこそ、中間をとった職業を選んだり、他のこととの両立が大切になってくるのだろうなと思いました。（神戸 / ピアノ /1 年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 27 年度　第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「演劇を用いたコミュニケーションデザイン」
講　師	蓮行（劇作家・演出家） 松岡咲子（劇団員・アシスタント）
実施日時	2015 年 10 月 16 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	第 6 回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、演劇とワークショップで幅広く活動されている蓮行氏を講師としてお迎えし、神戸女学院大学からの発信で実施した。 講義の冒頭は、「不親切グラフ」についての説明であった。これは、横軸を「与える側の親切度」、縦軸を「受け手の達成度」とし、親切度が高くなるほど受け手の達成度は低くなる反比例のグラフである。受け手の達成度が低い例として、自動車教習所での縦列駐車の教習を例に出し、蓮行先生とアシスタントの松岡さんによる寸劇も交えて説明した。「皆さんは大学での学びを社会に還元していかなければならない」と訴え、あえて不親切に講義を進めると述べた。 次に、「属性ゲーム」を行った。このゲームは、自分の特徴や属性が異なる人と三人組を作り、それぞれのグループでいくつ違っている点を見つけられたかを競い、発表した。 ひとまずグループに分かれ、俳優のトレーニングを使ったゲーム「エナジー回し」を行なった。これはエネルギーの塊を相手に向かって「ハッ！」という掛け声と共に投げ、受け手も「ハッ！」という掛け声と共に受け取る動作をするというものである。「受けたときの掛け声を忘れないように」という注意をふまえて、円をつくって立ち、隣の人にエネルギーを回していった。スピード・アップさせたり、色んな方向の人に回したりして、最後には神戸と東京でインターネット・ビデオを介して一つの円になり、画面を超えてのエナジー回しも体験した。 続いて、先ほどつくった三人組で「１分ジャーマネ」という演劇の遊びを行った。時は 2025 年、仕事の７割が人口知能に奪われる世の中で、採用を勝ち取らなければならないという設定である。場面は、求職者が仕事につけるように、会社の採用担当者の前で、マネージャーが１分間のプレゼンテーションを行うというものだ。まず、三人組の一人が求職者役、二人がマネージャー役になる。マネージャー役は求職者がどんな人なのか話を聞き、どんな業界に紹介するのかを考える。グループがプレゼンテーションをする間、聞いている学生は採用担当者役になり、採用したい人に一度だけ手を挙げていった。ここでは音楽関係以外の仕事に限定し、学生からロボット教育係や芸人など様々な職業が飛び出し、求職者役の学生の色々な面をまとめながらマネージャー役が発表していき、各グループによって工夫が見られた。 最後に、「社会人になり、民主主義社会の中で主権者として仕事をし、様々な意思決定に関わっていくトレーニングを体験してもらった。職業を越え、人に伝えていくにはどうしたらうまく伝えることができるのか。クラシック音楽ならば、馴染みのない人にどのように説明すれば親しんでもらえるか、クラシック音楽に関わる人口を増やすことができるかなど考えてみるのはどうか。」と学生へ投げかけて締め括った。

〈学生のことば〉

・「不親切グラフ」に大いに共感しました。親切に教えれば教える程、達成度が低く、不親切な程、学びが大きいというのは音大のレッスンがまさにそれだと思います。手取り足取り教わるより、「先生は何を言っているのだろう？」と自分で考えた時の方が、曲の完成度が高いと実感しています。しかし、クラシック音楽を一般に広めるという点では、“難しい”（ただ見て聞いただけでは理解できない）部分が多いので、１つ１つ解説し、丁寧に楽しみ方を教えることも大切だと思います。音楽はそこが大変だなと感じました。
（東京／ピアノ／４年）

・今回の講義は、非常に実践的で面白かったです。ワークを通して、自分で考える大切さ、集団における所属意識、相手を知ることやコミュニケーションを取ることの喜びなど、演劇以外の楽しさも感じることができました。音楽のワークショップでも音楽を知る、聴く、奏でるだけでなく、“分かち合う”幸せを伝えられたらなと思います。
（東京／ピアノ／４年）

・初めて演劇という音を使わないワークショップで、新鮮さがありました。蓮行先生にはワークショップ、授業の基礎のような、良い授業にするためのノウハウのようなものを教えていただきました。“達成度と学習の伸び”と“親切”は、反比例するということが、とても印象的でした。
（神戸／ピアノ／１年）

・人間の知能は厳しい環境下でこそ鍛えられる、というのは身に染みました。意識していきたいです。
（東京／フルート／４年）

・私も「できること」と「やりたいこと」に対し、自分がどうありたいか、これから考えてみたいです。
（東京／フルート／４年）

・エネルギーを送るゲームで、受けたというアクションは重要なことだと思いました。ゲーム内だけではなくて他の日常的な会話などの場面でも受ける人がいないと物事は成立しないし、会話で相槌がないと不安になるのと似ていると思いました。
（神戸／打楽器／１年）

・エネルギー送りで、一度受け止めるということをしましたが、毎日受け止めるということが必要となる中で、自分が受け止めたということを意識することが大切なのだと思います。
（神戸／ピアノ／１年）

・自分が教師の立場になった時に、また子どもに教えるような時に、親切になんでもかんでもやらないで、あえて不親切にするということをうまく子どもの成長につなげたいです。また、向いている仕事のワークショップのように、きちんと理論づけて、結果まで出し、説明できることを日常的にも心がけたいです。
（神戸／ピアノ／１年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 27 年度　第7回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第７回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学学生３名
実施日時	2015 年 11 月 20 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	2015 年 9 月 24 日～ 27 日に神戸女学院大学で実施した音楽ワークショップ特別研修（23 ～ 26 頁参照）について、この研修に参加した履修生を中心に発表を行った。 まずは、講師の簡単な説明から始まり、4 日間の研修について、各日の時間と大まかな流れを紹介し、主だった事柄については写真や映像で補足した。最終日の作品発表については、その作品を作るに至った経緯や工夫について発表してから、実際に作った作品を鑑賞した。 発表をした学生は 1 年生であったため、どのような内容の資料を作成すれば良いか、どのタイミングで写真や映像を流せばワークショップを体験していない人に理解してもらえるか等を考えるのが難しかったようである。東京音大からの質問を受け、自分たちに足りなかったものや、発表の仕方についても考える良い機会となった。

〈学生のことば〉

・今回の報告会に向けて、1 年生 3 人しかいないのに、もっと早い段階で打ち合わせをすべきだったと反省しました。個人的に準備がギリギリになったのですが、先輩もお呼びでき、東京音大の皆さんにお伝えすることはできたのではと思います。自分たちでプレゼン的なことをするのは初めてだったので、すごくよい経験になりました。またワークショップで学び得たことを思い返してみて、改めてインプットされた部分もありました。
（神戸 / ピアノ /1 年）

・東京音大に向かって発表するということで、とても緊張しました。ワークショップに参加した先輩方も感想を話しに来てくれて嬉しかった一方、プレッシャーも感じました。時間的には、私たちが思っていた以上によい長さでした。内容は 4 日間でやったことを普通に報告しただけでしたので、聞いている人たちはどうだったかなと思いました。
（神戸 / 打楽器 /1 年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 27 年度　第８回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第８回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
発表者	東京音楽大学学生４名
実施日時	2015 年 12 月 4 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
講座の概要	2015 年 7 月 24 日に区民ひろば南池袋で実施したワークショップ「みんなでつくろう！音楽の輪」（19 ～ 20 頁参照）と、9 月 23 日に東京音楽大学で実施した特別セミナーワークショップ（21 ～ 22 頁参照）、および 10 月 25 日に東京文化会館小ホールで行われたカーザ・ダ・ムジカの音楽ワークショップ「タ・タ・パ・トゥ・エラ」について、参加した学生が原稿と映像資料・配布資料を準備して報告を行った。 これまで音楽ワークショップとインタラクティブ・コンサートに積極的に関わってきた学生たちが、今度は、自分たちの活動について映像や配布資料を使いながらわかりやすく説明する初めての機会であった。どの資料で何を示し、トークで何を語るかということをグループで相談し、事前に予行演習を行い、準備に時間をかけたため、わかりやすいプレゼンテーションをすることができた。学生にはこういった機会を利用して、映像資料の扱いやパワーポイントに習熟していってもらいたい。

〈学生のことば〉

・東京音大のワークショップは女学院とまた違い、グループに分かれて行い、参加者の年齢層がベビーカーからお年寄りまでと差があったので、その作品作りや過程も違っておもしろいなぁと思いました。デッタ、ナターシャは音を探していって音楽を作るというワークショップで、劇を取り入れるワークショップは今回初めて見ました。

（神戸 / ピアノ /1 年）

・今回の講座を聞いて、実際体験した夏のワークショップ以外のものを見て、色んなタイプがあるんだなぁと思いました。でも共通点は、周りの状況をよく把握して、その場その場で一番良いと思う方法を瞬時に選択する能力が必要だと感じました。東京音大の方がおっしゃっていましたが、頭を常にフル回転させることが大事で、その経験したことを自分の意見もしっかり持って発表されていてすごいなぁと感動しました。ワークショップは、考えるのも大事ですが、それを説明することが私は苦手なので、これからは日ごろから即興に強くなれるように意識したいです。

（神戸 / ピアノ /1 年）

・発表のとき、レジュメだけしか作っておらず、東京音大の方のレジュメよりも分かりにくかったと思うし、内容ももっと組み立てて話ができるようになればと思いました。自然な話し方で聞きやすかったので、話し方も大切だと思いました。発表を聞いていて、わからなかったことや質問したいことが見つかりませんでしたが、それくらい詳しい発表ができるようになりたいです。

（神戸 / 打楽器 / 1 年）

・詳しくて見やすく分かりやすいレジュメを作る点を真似したいと思いました。話の中で伝えきれないことや、話すと長々となってしまうこと、また何回も確認したいことだけを書くことがポイントなのかなと思いました。話し方も、２，３歳しか変わらないと思えないほど堂々としていたので、真似できるようになりたいです。

（神戸 / ピアノ / 1 年）

平成 27 年度　第９回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第９回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
発表者	各大学担当者：武石みどり（東京音楽大学）、津上智実（神戸女学院大学音楽学部）
実施日時	2016 年 1 月 22 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	各大学教室：東京音楽大学 A 館地下 100 教室、神戸女学院大学音楽学部会議室
講座の概要	今年度のミュージック・コミュニケーション講座の総括として、各大学から以下の報告を行った。 １. 東京音楽大学 ・２月 17 日に区民ひろば南池袋で実施予定のシニア向けインタラクティブ・コンサートの企画を紹介した。パワーポイントによる説明や小楽器でのリズム打ち等をまじえて、バッハ以降の音楽の歴史をたどるプログラムで、今回は演奏者（クラリネット、ピアノ、声楽）とは別に MC を立てた形で進行する予定である。 ・大学間中継がない日の授業で、ワークショップの実践をどのように学んでいるかの例をして、アイスブレイクのリーディング練習の様子を動画で紹介した。 ・各学生が授業を受講した感想を語るビデオクリップを３～４名のグループで作成し、全４グループの映像を編集・作成したものを紹介した。ワークショップを学んで学生の考え方が柔軟になったことが、映像からよく伝わってきた。 ２. 神戸女学院大学 「神戸女学院のワークショップを振り返る」と題し、津上教授が 2007 年以来、ギルドホール音楽演劇学校から講師を招聘して行ってきた６回のワークショップについて説明したのち、第１回と第２回に講師を務めたショーン・グレゴリー氏のワークショップにおけるプレゼンテーションの組み立て例を動画で紹介した。 ここ数年のワークショップでは不規則リズムや不協和音が用いられることが多いが、グレゴリー氏のワークショップのプレゼンテーションは、規則的なリズムと調性・和声をともなうリフレインに周期的に戻る構成となっており、安定感のある音楽が構築される。なじみやすくわかりやすい音楽を構築することと、参加者の当事者意識 ownership を優先することとは見方によっては裏腹の関係にあり、昨今は後者に注目が集まっているが、ワークショップ学習者にとっては前者の方法も基礎的スキルとして重要である。今後も多様なワークショップ・デザインを心がけていきたい。

〈学生のことば〉

・この講座では、他の授業では滅多に体験できないようなことができ、とても刺激をうける講座でした。音楽のことを教える相手の年齢などもきちんと考え、面白さを伝えることがいかに難しいことかを知りました。（東京 / ピアノ /2 年）

・芸術とは何か？音楽とは何か？をもう一度考えさせられました。私の個人的な見解ではありますが、芸術の世界では、人と違った個性、人と違った音色を求めるものが多いように思っている部分がありました。難しいからこそ、やってみるべきなのだと理解していました。この講座の中では、ただ単に難しい技術は何も求められませんでした。例えば、アイスブレイクなど「どのようにすればより相手に伝わるだろうか」、音楽を作る上で、あるいは共有するうえで、必要な「相手」を意識した考え方、コミュニケーションあってのミュージック、本当の意味でのミュージックを通したコミュニケーションを教えてくれる内容だったと思います。（東京 / 声楽 /1 年）

音楽ワークショップ「みないけ キッズアーティスト『みんなでつくろう！音楽の輪』」

平成 27 年度　実習報告（東京音楽大学）

事業名称	みないけ キッズアーティスト『みんなでつくろう！音楽の輪』
実施日時	2015 年 7 月 24 日（金）13：00 ～ 15：00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	東京音楽大学 3 大学連携センター、豊島区立地域区民ひろば南池袋
対象	豊島区在住・在学の小学生（参加者数 39 名）
ワークショップ・リーダー	古田ひかる（3 年）佐藤由佳（3 年）宮本万莉也（4 年）
アシスタント	アシスタント：金田紋（3 年）猪野詩織（4 年）金谷早貴（4 年）
ピアノ	ピアノ：（4 年生　1名）

〈事業概要〉

夏休みに入ったばかりの小学生を対象に、学生が中心となり、手作り楽器の創作と演奏によるワークショップを行った。

事前の授業では、導入（アイスブレイク）に用いるボディーパーカッションやゲーム、リーディングの方法について繰り返し学び、また即興演奏の方法についても実践練習を重ねた。事後の授業では、ワークショップの記録作成、報告書の作成と口頭報告の原稿と資料作りに取り組んだ。

＊学童の呼び込み
・ワークショップの開始前に同施設内の学童に追加参加の児童を募集。手作り楽器を持って即興演奏を実施。

＊アイスブレイク 15 分
・生演奏によるラジオ体操
・リズムアンサンブル（コールアンドレスポンス）
・歌を教える（既存曲に歌詞をつけたもの）

＊楽器作り 30 分
・カスタネット、シェイカー、太鼓、笛の 4 種類をそれぞれの場所に分かれて作成

＊作った楽器を使ってのアイスブレイク 15 分
・リーダーによる即興演奏実演
・リズムアンサンブル
・リズム創作

＊音楽に合わせて合奏リハーサル
・歌の復習
・曲に合わせて流れの確認
・通し練習

＊発表
・保護者を会場に招いて演奏発表

〈学生たちの声〉

・こども達が作った楽器を大事そうにしまう姿を見て、楽しい夏の思い出が形となって残りよかったと思った。ワークショップのメインが「楽器づくり」になるプログラムの良さも感じた。

・進行する側からすると、立てた計画通りに進まなかったことは大きな失敗だと思ってしまうが、子供たちは当然進行予定を知らないので、最終的に「楽しかった」と子供たちが思ってくれたならいいんだよ、と先生もおっしゃってくれました。その場に応じて臨機応変に変えていけるような柔軟な思考を持つことが大切だと感じました。

・スマートな臨機応変はもちろん理想だが、それは長期的な課題にして、まずは「どういった気持ちで帰ってもらいたいか」や「今何が必要か」を強くイメージ・観察することが大切だと感じました。

ワークショップの様子

東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座特別セミナー

平成 27 年度　実習報告（東京音楽大学）

事業名称	ミュージック・コミュニケーション講座　特別セミナー
実施日時	2015 年 9 月 23 日（水・祝）10：00 ～ 16：30
実施場所	東京音楽大学Ａ館
主催	東京音楽大学３大学連携センター
講師	デッタ・ダンフォード　ナターシャ・ジエラジンスキ
参加者数	ミュージックコミュニケーション講座履修者 ４名 一般参加者 11 名

〈事業概要〉

ギルドホール音楽演劇学校よりデッタとナターシャの二人を講師として迎え、自由な音楽づくりのワークショップを行った。履修学生は音楽ワークショップに参加したことがなく、反対に一般参加者はすでに実社会で音楽ワークショップを実践している立場の人が多かったため、初心者にとっては「音楽ワークショップを体験する機会」となり、経験者には「音楽ワークショップでセミ・リーダーの役目を果たす機会」となるように工夫した。

３年前に同じ講師２名が指導した際との大きな違いは、ワークショップリーダーがリードする度合いが減り、参加者の発案に任せて即興的に進む度合いが増した点である。参加者の自由な提案を促進するために、参加者が一緒に行動したり互いに話し合ったりするシーンが多く設けられた。このことにより、即興といってもその場の思いつきだけで進むのではなく、どういうシーンを想像してどういう音を思い描くのかというコンセプトを常に確かめ合いながら創作が進められた。同じ講師であっても多様なワークショップを展開し決してワンパターンに陥らない懐の深さを見て、試行錯誤しながら進むことへの恐れが薄れるとともに、音楽的スキルと同様にコミュニケーション力が重要であることを再認識した。

10:00-11:00

導入（アイスブレイク）

ボディーパーカッションによるアイスブレイクに始まり、自己紹介を兼ねた名前のゲームを行った。ポストカードを床に並べ自分と感性と合うものを一人一枚選び、選んだカードについてディスカッションを行い場の空気を和ませた。単純に自己紹介を行うのではなく一つの素材を介して自己表現をすることで、より他人との距離を縮めるきっかけとなった。

11:10-12:10

素材集め

３人一組のグループを作り「秋」をテーマに学外へ素材を探しに出かける。

大学周辺を歩き回り、落ち葉や落ちていた路線図、陽射し、石の上を歩く音など各グループが様々な素材を持ち帰った。リラックスした空間のなか自由に会話しながら楽しい時間を過ごすことができた。緊張気味であった学生も、この時間を機に外部参加者とも打ち解けていった。

13:00-14:00

音楽創作

集めた素材を基にストーリーを創作した。

それぞれ、電車・風・ジャパニーズ・サイレンスとテーマをつけ音楽を創作し、最終的に３つの素材と繋ぎの部分を作って、全体を一つの作品に構成して演奏した。参加者が全員音楽に携わる人であったために、とてもクォリティの高い音楽作品が出来上がった。

14:10-15:10

ディスカッション・総括

外部参加者が多かったため、実践的な質問が多く飛び交った。

〈参加者の声〉

・視覚、聴覚、触覚（拍手など）を使って相手を感じながらコミュニケーションをとる音楽セッションを行う大切さを学びました。即興演奏は演奏する側も、聞く側も何が起こるかわからないところが面白いと思った。先生がおっしゃった全て正しい、間違っているものはないという言葉がとても印象的でした。

・初対面のひとでも最後には打ち解けて音楽をすることができました。

・今までリーダーは常に元気にファシリテートしなくてはという考えがあったが、やさしく受け止めながらリラックスしたムードで進めるやり方がとても素敵で心地よく感じました。

・参加者から思いを引き出す方法、自分がしてもらいこと、相手が必要としていることのバランスを考えてワークショップしていきたいです。

・小さな素材から音楽を作り出していく術を学びました。音楽の細部に注目すると表現の幅が広がり、面白さが倍増すると思いました。

・ワークショップリーダーとして参加者の多様性に応じた振る舞いをしていきたいと思った。

セミナーの様子

「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第６回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 27 年度　実習報告（神戸女学院大学）

事業名称	「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 6 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導者	ナターシャ・ジエラジンスキ、デッタ・ダンフォード、東 瑛子 （英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生）
企画・司会	津上　智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時・期間	2015 年 9 月 24 日（木）14：00 ～ 17：00、9 月 25 日（金）17：15 ～ 19：00 9 月 26 日（土）10：30 ～ 16：30、9 月 27 日（日）13：00 ～ 19：15 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	神戸女学院大学音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、3 大学連携事業ミュージック・コミュニケー ション講座受講生・既習生（卒業生含む）は無料 一般の参加者（上記以外）: 全日参加 :5.000 円 27 日子ども参加 : 無料
主催・協力など	主催 : 神戸女学院大学音楽学部 協力 : 英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	9 月 24 日～ 26 日：神戸女学院生 13 名（1 年生 7 名、3 年生 3 名、4 年生 3 名）、 一般参加者女性 2 名 9 月 27 日：神戸女学院生 15 名（1 年生 5 名、3 年生 4 名、4 年生 4 名、院生 2 名） 一般参加者 女性 1 名、 子ども 21 名（小 1 年生 1 名（3 名）、小 2 年生 9 名、小 3 年生 6 名 (2 名)) ＊（　）は男の子 教員・スタッフ 6 名、逐次通訳 6 名（院生 6 名）

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通し、誰もが持っているクリエイティブなアイディアや能力を引き出し、またコミュニケーション能力やリーダーシップなど、これから社会に飛び立つ学生にとって必要な力を実践的に身につけることである。

そのため、2015 年度 9 月 24 日からの 4 日間、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースの修了生であり、世界で活躍する若手の音楽家であるデッタ・ダンフォード（フルート奏者・作曲家）、ナターシャ・ジエラジンスキ（チェロ奏者・作曲家）２名を日本に招聘し、また同修了生で本学卒業生の東瑛子（ヴァイオリン）を講師として迎え、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ（Creative Music Workshop）特別研修を実施した。

9 月 24 日から 9 月 26 日までの 3 日間は学生対象の研修を計 4 コマ、最終日の 9 月 27 日には学生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第 6 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施）。

３日間のワークショップ研修では、毎回全員で１つの大きな輪をつくり、身体をほぐしたり手拍子や息の音を隣の人に回したりするアイス・ブレイクから開始された。他者との一体感を得ると共に、個々が自分自身に向き合う時間があり、どう感じているか、どんな風に表現したいかなど、より深い自己表現ができる環境づくりがなされていた。また、必ず一日の終わりには、フィードバックがなされ、入念に振り返る機会ももたれていた。

１日目は、講師が持参した絵が書いてあるポス

トカードから、学生が自分の性格や音楽に対する思いに近いと思うものを選び、どのあたりに親近感を得たかを伝え合う、自己を見つめてアウトプットするワークや、「１つの素材からイマジネーションを広げて音楽を創造する」という実践のため、講師が歌詞のついた１曲を学生にシェアし、その曲から学生が受けた印象や、想像した風景、登場人物などを元に、音楽づくりが行われた。

２日目は、１日目に創作した曲を使って、楽器

で演奏していたものを、声や息、身体を使うと、どう表現できるかを考えたり、どのようにアイディアを組み合わせると、より良くなるのか考えたり、創造するだけではなく、工夫することを実践的に学んだ。また、学生がリードする機会も設けられ、演奏の始め方や止め方、強弱の表し方、テンポの変化のさせ方など、言葉を使わずに、いかに目線や空気感で表現するか、またそれを敏感に感じとるために必要なことなど、リーダーとして必要なスキルを学んだ。

３日目は、ここまでの２日間で行ったことを思い出し、アウトプットしていくワークが行われた。“Thinking Map” を使い、１日目から行ってきたワークや印象に残った言葉や、最終日に向けてこうしていきたい、こうなりたいという希望を、画用紙やポストイットに書き出して、時系列で並べていった。感じたことや思いが視覚化することで客観的に見ることができ、学生たちはワークショップの理解をより深められたようだった。

その後、より自分と深く対話するためのワーク

が行われた。部屋のいたるところに学生が散らばり、「自分の心の中にある熱意や音楽をどんな風に表現したいか？」という質問に対し、目を閉じて集中して考える。より深く自分と向き合った後、それぞれに楽器を手に持って考えを表現できる音

を探した。そして、その音を他者へ向けて発信、相手がその音を受けとめて、再発信する。このワークでは言葉を使わず、音で言葉を紡いで会話するような方法で、意思疎通の図り方を学んだ。そして、翌日にせまった「子どものための音楽づくりワークショップ」の準備が具体的に進められていき、どのテーマをもって、子どもたちと音楽をつくっていくかということを考えた。また、アイスブレイクの際に学生がチームに分かれ、ウォームアップ、ボディー・パーカッション、歌の３つのワークを行い、子どもたちをリードする機会が設けられることになった。チームでアイディアを出し合い、どの場面でどうリードをするか、どんなワークを行うかなど話し合った後、実際に学生を相手にしながらワークの実践を試行した。講師からのアドバイスや学生からやってみた感想を受けたところで、いよいよ最終日を残すのみとなった。

いよいよ最終日となった９月 27 日には、小学校

１年生から小学校４年生までの子ども 21 名を交えて、第６回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」が開催された。子どもたちは、各自持参した楽器や、本学で用意した小物打楽器などを持ち、音楽づくりに参加した。講師の挨拶と紹介の後、参加者全員が一つの大きな輪になり、

学生によるアイスブレイクが行われた。アイスブレイクでは、ワーク中に飛び出した、子どものオリジナルのアイディアを上手くワークに取り入れたり、学生の中でリーダーへの集中を子どもたちに促したりする場面が見られ、柔軟に対応ができていて、また子どもたちの緊張もほぐれてきたようだった。アイスブレイクが終わった後、今回のワークショップのテーマが発表された。今回のテーマは「お月見」。当日 27 日が十五夜だったことからこのテーマが決定したことが伝えられ、お月見の歌である「うさぎ」が子どもたちに振り付けと一緒にシェアされた。その後、講師陣から子どもたちへ「月はどんなところ？どんな動物が住んでいる？どんなことが起きているだろう？」と様々な質問が投げかけられ、音楽づくりに必要な子どもたちのアイディアを引き出していった。そこで出たアイディアを元にお話を繋ぎ合わせ、月のグループ、うさぎの王国グループ、うさぎの祭りグループと、３つのグループにわかれ、子どもたちのアイディアを元に音楽づくりへと進んでいった。

グループ・ワークでは、講師陣がリードし、学

生は積極的に子どもたちへ話しかけ、どんどんアイディアが音楽へと変換されていった。そして、各グループがそれぞれに特色ある音楽を作り出し、楽器で表現したり、声や身体を存分に使ったりした後、グループ毎にできた作品が講師の指揮の下一つの大きな作品に繋ぎあわされていった。

１日の締めくくりとして、保護者が観客席で見守る中、完成した作品の発表会を開催した。それぞれのグループで作り上げた作品を次々に披露し、各場面で学生がリードしたり、子どもがリードしたりする場面も見ることができた。そして最後には、保護者も踊りに加わり、踊ったり歌ったりと大変な盛り上がりを見せて、発表を終えることができた。演奏を終えた後、子どもたちと学生の間では、ハイタッチをしたり、お互いほめあったりする様子などが見られ、達成感に溢れる表情を見ることができた。

最後に、今日あったことを絵に描くことで、子

どもや学生、保護者も一緒に、フィードバックを行うことができた。うさぎが走ったり、踊ったりしている場面や、お月見のだんごを作っているところなど、絵に描くことによって、子どもたちがどのように音楽を感じ取っていたかをよりよく知る機会となった。

また、子どもたちが帰った後、学生たちは講師陣と研修全体、また最終日についてのディスカッションを行った。そこでは、自分自身と向き合い、自問自答し、常に何ができるのかを考え続けることの大切さや、また相手を尊重し、何かを一緒にやるという、基本的な社会構成を学ぶためには音楽が最適であり、それが音楽の素晴らしさであることなど、学生を勇気付け、パワーになるような言葉が投げかけられ、有意義な時間となった。

なお、全日程を通じて本学大学院通訳コースの院生６名が交代で逐次通訳を行い、相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。

〈参加者の声〉

・ワークショップに参加するのは初めてだったので、どんなことをするのかわからず、とても緊張してしまいましたが、少しずつ自分の内面が自然に出てくるように感じました。最終日に子どもたちと一緒に音楽作りをした時、子どもたちの常識にとらわれない自由な発想（次はドーナツ型とか、うさぎが太陽へ飛んでゆくなど）が面白かったです。それを音楽にするのは自分にとって新しいことだったし、思っていたほど難しくなかったと思いました。
（打楽器 /1 年）

・いろいろな人とその場で曲を作り上げて、互いにそのハーモニーの中にいることを実感する喜びを知ることができました。また、音楽を創っていく上で、こんなに積極的になれたのは初めてで、でもその空間が心地よかったです。（声楽 /1 年）

・「音楽の広げ方」を活かしていきたいです。音に対してイメージを持ったり、体で表現したり、絵を描いたりして具現化していくことで、伝えたい音楽を自分の中でいっそう明確にしていきたいと思いました。また、自分の心の赴くままにやりたい音楽を奏でる喜びを強く感じたので、「失敗したらどうしよう」と後ろ向きになってしまわないような、前向きになれる音楽を作っていきたいと思いました。（ピアノ /1 年）

・音楽面だけではなく、いろいろな面で活かしたいと思うことがたくさんありました。目を閉じて想像したり、自分の気持ちを見つめる時間を持つこと。周りの様子をよく観察しつつも自分の意見は自分ではっきり決めて、それをちゃんと伝わるように表すこと。また、自分たちがしてきたことを紙に書いて、道のりのマップを作ることは、楽しく簡単にそれまでの復習やこれからのことを考えられるので、良いなと思いました。
（ピアノ /1 年）

・毎日、何かに取り組んだ後に先生と学生でフィードバックの場が持たれたことが良かったと思います。この作業があったことで、自分たちの目指すものを明確にイメージしながら、充実した時間が過ごせたように思います。
（声楽 /1 年）

・ちょうど前日にオーケストラに参加していて、一つの音楽を大勢で作り上げるという過程を経験しました。今日は、子どもたちの意見や私たちの意見、つまりこれも何人もの人で新しい音楽を作り上げるという状況が同じでした。どちらも普段、独奏楽器であるピアノを弾いている私にはなかなか経験できない貴重なもので、今日のように「意見を出し合う」ことを応用して自分 1 人で客観的に見たり、主観的に見たりしてみると、ソロの練習にも活かせるかもしれないと思いました。（ピアノ / 院 1）

・初めて参加させていただきましたが、大変充実したひとときを過ごし、いろいろな事を学びました。講師の先生方も大変フレンドリーな雰囲気を作ってくださり、演奏以外に大切な「表現する」「アイコンタクト」「コミュニケーションの取り方」「伝え方」「パッションを出す」など、音楽本来の役割を改めて教えてくださいました。（一般参加）

・季節にちなんだテーマが上手に表現されていたと思います。子どもたちと学生さんたち、先生方とアイディアを出し合いながら、作り上げたという曲、素敵でした。
（保護者）

・短時間で小さい子どもでも皆まとまって素敵に演奏できて、すごい！と感心しました。皆楽しそうに生き生きと音楽を楽しんでいて、見ている側もすごく楽しさが伝わってきました。（保護者）

おわりに

平成 21 年度にスタートした音楽系３大学（東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学）の連携プロジェクトは、７年目を迎えて、さらに充実した活動を展開することができました。

今年度は、共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の開講時間を水曜日の放課後から金曜日の午後一番（東京音楽大学では４限、神戸女学院大学では３限に当たる時間帯）に移したことで、受講生が大幅に増えて活気が増しました。インターネット・ビデオ会議システムによる中継授業に多彩な講師陣を擁した他、９月にはギルドホール音楽院リーダーシップコースの修了生２名を講師として日本に招聘し、東京音楽大学と神戸女学院大学で音楽作りワークショップの実践的な指導を受けました。各大学で実践したワークショップについて、画面を通して情報を共有する機会も設けました。大学の壁を超えて自分たちの活動を報告し、意見交換することは、学生たちにとって刺激的かつ豊かな学びの場となっています。

この３月には、アーツカウンシル東京の主催によるフォーラム＆ワークショップ「音楽がヒラク未来〜明日のワークショップを考える〜」が池袋の東京芸術劇場で開催されます。これはピアニスト仲道郁代の企画構成により、音楽ワークショップを多角的に捉えて「音楽と共にある未来」を考えようとするものです。ミュージック・コミュニケーション講座が過去７年にわたって地道に続けてきた努力が、こうした流れと結び合うことによって、大きなうねりとなっていけば何よりです。

今後も本プロジェクトの意義と成果を社会にアピールし、優れた人材を輩出すべく、プロジェクト内容を工夫していきたいと思います。この取組を支えて下さっている学内外の皆様方に御礼申し上げますと同時に、今後とも更なるご理解とご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

2016（平成 28）年３月

津上智実（神戸女学院大学音楽学部　教授）

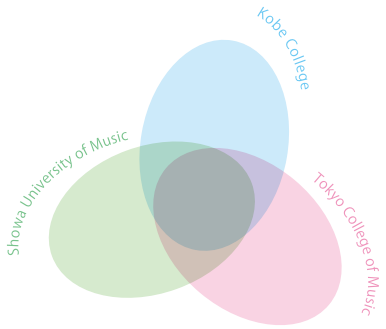
共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 27 年度　活動報告書

平成 28 年 3 月　発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5
Tel:03-3982-3513 Fax:03-3982-3227

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター



音楽の力、伝えるスキル。

文部科学省選定　音楽系3大学による共同プロジェクト